

「東電の処理水の海洋放出に反対する」

2022年01月29日

『週刊金曜日』の1月28日の「論考」に、私の投書が掲載されたので、転載する。

〈東京電力は、福島第一原発事故での汚染水が貯蔵能力を超えることから、海洋放出に向けた実施計画をまとめ、昨年12月に原子力規制委員会に申請した。浄化処理した汚染水を「処理水」と言っているが、放射性物質トリチウムが残っているので、とても「処理水」とは言えない。それを「処理水」と言って、あたかも害がないように言うのはごまかしである。このごまかしは加害者側が巧みに用いる手法で、これらのフェイクに惑わされてはならない。「汚染水」と言った方が正確である。

東電は、トリチウム濃度を国の排出基準の40分の1未満にし、海底トンネルを通じて、沖合1キロメートルの海洋に放出しているから、人体には影響がないと言う。地元の漁業協同組合は、「風評被害」を恐れ、当初から海洋放出に反対している。当然であろう。東電は2015年に、「関係者の理解なしにいかなる処分（海洋放出）もしない」と約束していた。

東電の言う「処理水」には、基準以下とはいえ、トリチウムが存在する。トリチウムは半減期が12年ほどと比較的短いので、安易な放出をもくろんだのではないか。また、放出が最も安価であるからではないか。放出した「汚染水」に存在するトリチウムが、人体に影響はないのかを科学的に検証する必要がある。1980年代の動物実験では、トリチウムに被ばくした動物の子孫の卵巣に腫瘍が発生する率が5倍に増加し、生殖器や脳に支障があったと報告されている。人間の場合でも、脂肪組織が多い部位にトリチウムは入り、被ばくしたら、異常が起こり得る。染色体異常を来すという報告を知っていたから、国は、10年間放出せずに貯め置いたのではないか。

トリチウムは放射線があるだけでなく、他の物質と結合して化学構造式を変えてしまう。人間のDNAの構造式も変えかねない。麻生太郎前副総理は「飲めるんじゃないですか」などと能天気なことを言っているが、放出されたトリチウムが食物連鎖によって濃縮され、汚染した農地からの作物摂取などで、体内に入った場合、放射線物質だけに、思いもよらない支障が出る可能性がある。しかも、何代か後に影響が出るかもしれない。

最近、トリチウムを除去する技術が進歩したと聞く。小さな孔のあるアルミニウムフィルターを通せば、除去できるし、トリチウムの沸点差を利用して、水とトリチウムを分離することができるという。そうした除去技術を確かなものにしてほしい。

まず「処理水」などと、きれいな水であるかのようなフェイクは、即刻、止めてもらいたい。そして、人体に影響を与えかねないものを放出してはならない。影響が出てからでは遅い。科学的にトリチウムを取り除いた真の「処理水」に変えてから、海洋放出すべきである。〉

福島原発事故で大気中に放出された放射能は、広島原爆の168倍、海に放出されたものを加算すれば1千個分と言われている。人体に影響がない訳がない。「トモダチ作戦」に関わった米兵には死者が出ていると聞く。福島県民のがんの罹患率は高く、甲状腺がんは異常に高い。県の専門家会議は「被曝とがんの因果関係は認められない」と言い、検診も後ろ向きである。病気は早期発見、早期治療が鉄則ではないか。27日に、被曝の影響で甲状腺がんになったと、17～27歳の男女6名が東電に対して、6億円を超す損害賠償を東京地裁に起こした。原告たちは結婚・出産に不安を覚えているが、勇気をもって訴訟を起こした。東電は、言葉は丁寧だが、電気が生活必需品であるためか、被害者に対し冷淡である。この裁判で、因果関係を徹底的に明らかにし、被害者を救済してもらいたい。